

神奈川県立中原養護学校高等部 一年

普通の子と違う子がいる所？

荒木 唯穂

「支援級って普通の子と違う子がいる所」支援級の教室を通るたびなんとなくそう思っていました。支援級の子が交流級のクラスにでると授業中ふざけていたり、一人でブツブツ何か言っていたり、一つの事に集中してしまったりその行動を止められずに注意を受けている子を何度か見ました。

私は小学校3年生の時に、発達障害と診断されました。意外に思うかもしれませんが、発達障害があると聞いても私はあまり驚きませんでした。自分が普通の人よりやる事がゆっくりだったり、勉強があまりできない事を分かっていただけです。苦手な事が多いせいで苦しんできたので、支援級に入って同じ障害をもった子と同じペースで授業を受けられる事がうれしかったです。

支援級に入ってしまったら家庭の事情で転校しました。転校先の学校でイジメを受けました。私が近くの席に来るとわざと机を離したり、私の事を「障害!!」と呼んだ

り、家庭科の授業の時、裁縫用の針を私に刺そうとしてくる子もいました。そういう事が嫌で私は不登校になりました。イジメの事を相談したかったのですが、しかえしされるのが怖くてできませんでした。その後、それが理由で自信を無くしてしまい、家族に暴力をふるうようになりました。そして中学校一年生の時、家族と心の距離をとるために施設に入所しました。初めての場所に来た不安があつて、初めは入所している子とケンカをしたり、お世話をしてくれる職員さんとぶつかる事もありました。しかし、私は日々変わっていききました。怒られて悲しくて泣いた事もあつたけど、それも今につなげる事ができました。一人で苦しんできたけど、今は一人ではありません。まちがえている事があつたら教えてくれる人、悲しんでいたら話を聞いてくれる人、ケンカもしたけど本当は優しい人。沢山の人の出会い、私は成長できました。

「支援級って普通の子と違う子がいる所」と言いました

が、人はみんな違って同じ人など一人もいません。確かに普通の人より苦手な事が多かったりしますが、工夫をすれば出来る事だってたくさんあります。それに障害をもって
いる人の中には普通の人より優れている所がある人だっています。私は勉強は苦手だけど絵を描く事と文章を書く事が得意です。それに、私の周りにはスポーツが得意だったり、歌が得意だったりする人もいます。得意な事ばかりのばして他の事が全く出来なくなるのは良くないですが得意な事をのばしつつ苦手な事も工夫してできるようになればいいなと思っています。

この作文を書いていると昔の自分より今の自分の方が良い方に変わっているのが分かります。だから私と同じように、障害をもって苦しんでいる人も工夫したり、周りにサポートしてもらったりしてつらい思いをしないようになってほしいです。自分の事を嫌いだと思ってる人は、自分の良い所を見つけて自信をもってほしいと思いました。自信をもつだけで考え方が変わるので、障害を理由にいろいろな事を、諦めないでほしいです。

宮城県立西多賀支援学校 三年

祖母と私

坂本 波奈

私の祖母は、大正生まれの九十四歳です。認知症があります。食べたことも自分がどこにいるのかもわからなくなるようですが、私のことはいつも「はなちゃん」と忘れずに言ってくれます。

私は生まれつき脳性麻痺の障がいがあり、支援学校の高等部に通っています。なんとか自由に使えるのは右手ぐらいでいつもは車椅子に乗っています。日常生活ではヘルパーさんや親に介助をしてもらいながらも楽しく生活を送っています。

私と祖母が同居し始めたのは六年前のことでした。祖父が亡くなってから祖母は一人暮らしとなり、翌年東日本大震災が起きました。その頃から徐々に祖母の認知症も進み始めて心配事も多くなり、私の中学校入学と同時に横浜から仙台に引っ越し、祖母との同居生活が始まりました。その頃の祖母は認知症があってもまだ体力もあって、学校の話聞いてくれたり、カルタやトランプをして遊んでく

れました。

当時、私と祖母が交換日記のようなことをしていた時期がありました。

「いつもおばあちゃんが笑っている顔を見てると明るくなります。その笑顔をこれからもたくさん私に見せてね。おばあちゃんの笑顔を見ると、私も自然に笑顔になるよ。これからも私と一緒にいっぱい遊んでね！よろしくね！ 波奈より」

「はなちゃんへ おばあちゃんも同じですよ。はなちゃんがそばにいるだけでもうれしい。おしゃべりするともつと、もつとよ！明日は何をしようかな？おしゃべり、おえかき？？楽しみに」

「おばあちゃんへ 私から見るとおばあちゃんの印象はとても明るい人です。たまに一緒に遊んでくれてありがとう。おばあちゃんから見て私の印象はどうですか？あとで私に教えてね。波奈より」

「はなちゃんへ ありがとうー。うれしい！おじいちゃん
がないのだけが残念。写真が喜んでますよ」

その後にはこのようなことも書かれていますよ。

「おじいちゃんが居るだけで安心。そして毎日楽しく過ご
せます」

祖母の心の中にはずっとおじいちゃんがいるのでしょ
う。その頃の私は、きつと写真の優しそうな顔をしたおじ
いちゃんが祖母に声をかけていたのかなと思っていました。

若いころの祖母は行動的な人だったそうです。ゴルフを
やったり絵を描いたり、裁縫や料理も得意で、華道の先生
やPTA役員などもやっていたと母から聞きました。その
中でも今も続けていることが絵を描くことです。私はその
祖母しか知りません。おじいちゃんが亡くなってからは大
きなキャンバスに描くことをやめ、身の回りをスケッチす
るようになりました。私が勉強している姿と祖父の写真を
毎日何枚も何枚も楽しそうに描いています。集中力が途切
れず、好きなことをずっと続けている祖母を尊敬していま
す。たまにご飯を食べるのをやめて描いている時もあり母
に怒られます。私は手も不自由なので絵を上手に描くこと
ができません。いつも祖母の絵を羨ましく見ていました。
「おばあちゃんへ 私はおばあちゃんの描いた絵ってと
ても才能がある絵ですごいと思います。どうやったらおば

あちゃんみたいに上手な絵が私も描けるの？コツを今度私
に教えてね！波奈より」

「はなちゃんへ 絵が描ければいいの。いいきもちが絵に
あらわれますよ」

祖母と私の関係は、認知症のある祖母と障がいを持つ私
ではありません。普通の孫とおばあちゃんなのです。一般
的に認知症はいろいろなことが出来なくなると思われてい
ますが、私にとっての祖母はまだまだ何でも器用にできる
人なのです。例えばいつも洗濯物をたたんでくれます。し
わを伸ばしながら丁寧なたたんでくれるので、家族は気持
ちよく服を着たり、タオルを使ったりすることができま
す。

祖母も私が勉強している姿を見て、スケッチブックの片
隅に「ガンバレ！波奈を見習って自学自習」と書いていま
す。それを見ると少しは私も祖母の役に立っているのかな
と思います。

私は「障がいがあっても頑張っている」と言われるより
も、祖母のメッセージのように前書きのない純粋なエール
が一番嬉しいです。

祖母はこの夏、心筋梗塞という病気をして入院しまし
た。コロナの流行のため病院の面会も出来ないで様子も
しばらくわからず、正直、もうだめかもしれないと思って
いました。しかし徐々に回復し、今は前のように家で絵を

描き続けています。誰もがすごい生命力だと驚いています。そしてまた毎日の日課であった足踏み五十回が始まりました。私はその音で今日は元気か元気でないかがわかります。少しずつ力強い音に戻っています。

今の祖母は自分から話をすることはあまりありません。しかし、いつものメモ書きには「夕食ありがとう。オイシイ!」と書いてあります。そして寝る前には必ず「先に寝て悪いね。ごめんなさいね」と言います。私は、いつも周りに気を遣い、当たり前のことにも感謝を忘れない祖母をお手本に見習っていきたいと思っています。

◇心の輪を広げる体験作文◇

静岡県立西部特別支援学校高等部 一年

僕は健常者と障がい者

鈴木 悠太

ある日、僕は障がい者になった。

中学一年の冬、僕は水泳の飛び込みで首の骨を折った。水の上に出たくても体が動かない。このまま死んでしまうのか・・・と意識がなくなり心臓が止まった。

次の日、気がつくと僕は知らない部屋で横になっていて。起きたたくても体を起こせない。

声を出したくても人工呼吸器に繋がれているため声が出ない。薬の効果か意識が朦朧とする。首の後ろが痛い。心肺蘇生をされた後救急車で病院に運ばれ首の骨が折れているところを固定する手術を受けたためだった。ご飯も水分も飲み込むことが出来ないため鼻から胃まで繋がるチューブが入れられていた。

そんな状態が二ヶ月続いた。医者から僕は頸髄損傷だと言われた。神経が傷ついて体の感覚がなくなり損傷部位によるが僕の場合は肩から下を動かすことが出来なくなるというものだった。人工呼吸器が喉に繋がっていても痛

かった。栄養を鼻からチューブを通して入れるため、とても気持ち悪くて何回も吐いた。絶望を感じた。何度も『死にたい』と思った。泣いて涙が頬をつたっても手が動かないので涙を拭くことも出来ない。

入院は一年に及んだ。人工呼吸器は外せるようになったが手足は動かないままだ。

怪我をする前の中学一年の時、障がい者とのふれ合いで、ある障がい者施設へ行った。

話しをしたり簡単なゲームをしたりした。帰り際に何故か追い掛けられた。初めて人を「怖い」と思ってしまった。障がい者≠怖いという印象を受けた。今まで生きてきた十三年間で初めて障がい者の存在を知った。

普通に歩いて、普通の会話が出来、普通の暮らしが出来る。この普通がある日を境に全く出来なくなってしまう

のだ。

そう、僕も障がい者の仲間入りしたのだ。

一年の入院後、自宅とは別の場所に帰った。

健常者の身体で「行ってきます。」と自宅を出たまま一年後、障がい者となって車椅子に乗って帰ってきた。顎で操作する電動車椅子のため車体が大きく自宅は狭かった。そんな車椅子に乗っている自分の姿を誰にも見られなくなかった。しばらく家に引きこもっていた。

数ヶ月したある日、勇気を出して近くのコンビニに行ってみた。みんなの視線が痛かった。二度見、三度見される。知り合いには絶対、会いたくなかった。もう帰りたい……。

その日以来しばらく家から出なくなつた。

しかし、僕は中学生。義務教育中なので学校に通わなければならぬ。怪我をする前に通っていた中学校はエレベーターもなく階段や坂が多かった。健常者だった僕は何不自由なく普通に自転車を通っていた。しかし障がい者になつた僕の身体では普通校は通える場所ではなかった。友達と楽しく過ごしていた学校も転校を余儀なくされた。仲の良かった友達や慣れた場所と掛け離れた未知の世界の支援学校に転校して、とても辛かった。

普通の中学生なら朝、自分で起き着替えをし朝食を食べ身支度をし、すぐ家を出ることができる。しかし、この身体では全てを介助してもらわないと身支度ができない。起

きてから家を出るまで二時間は掛かってしまう。

何もできなくなつてしまった自分にイライラする。

やっとの思いで学校に着くと、そこには、いろいろな障がいを抱えた子達が沢山いた。

今まで知らなかつた世界だ。皆いろんな人の手助けを貸りて学校に来て、しかも楽しそうにしている。そんな姿を見ているうちに自分だけじゃないんだ……。という感情が芽生えた。だんだんと自分の中の「障がい者」という怖いイメージが溶けていった。それと同時に外に出てみようという気持ちにもなつた。最初に感じた他人の視線が怖かつた自分を越えられるか勇気がいった。買物や外食に行つてみようと思つた。

ある日、お店の前に車椅子をとめたら店員さんがドアを開けてくれ中に案内してくれた。

中にいるお客さんも通路を譲つてくれる。あれ!? 今までと違う感覚だ。嬉しかった。

車椅子姿を誰にも見られなくなつた自分が嘘のようだった。人の優しさに触れた瞬間だった。頑張つてね、と声を掛けてくれる人もいた。自分が健常者と障がい者の架け橋になっている。そう思えた。怪我をして障がい者になつたことは不幸な事だったかもしれない。しかし、失つた事は多いけど得たものも必ずある気がする。

僕は健常者と障がい者と二度味わう人生になった。再生

医療で動ける体を手に入れ、もしかしたら、また健常者に近づくことが出来るかもしれない。

健常者の気持ちも障がい者の気持ちも僕ならわかる。両者の架け橋になりたい。

障害は害ではない。人間の気持ちを解きほぐしてくれるキラキラ輝くものが僕には見えた。

これから健常者と障がい者が分け隔てなく共に助け合い共存できる、そんな社会になるために、自分の身体だから出来る架け橋をしていきたい。

◇心の輪を広げる体験作文◇

関西創価高等学校 一年

僕の見る「障がい」

林 勇希

僕には、特別支援学級に通っている妹がいます。そのことで、僕の家族にとって「障がい」はとても身近です。だから改めて考えてみたことはありませんでした。

最近、父が監督をしているバスケットボールチームでの出来事から、「障がい」について改めて考えました。

最近、特別支援学級在籍のお子さんが、父のチームに入部したいということで、ご家族が相談に来られたそうです。入部動機は、仲の良い友達がチームに居てどうしても入部したいと本人が言うとのことでした。しかし、大抵の習い事は障がいがあることでお断りされること、入部できたととしても、チームにご迷惑がかからないかなど、さまざまな心配事を持ってこられたそうです。僕の母も妹のことで、保育園や幼稚園、習い事を断られた経験をしてきたそう、気持ちをよくわかると言いました。

僕の父は特別支援学級の担任をしており、バスケの指導だけでなく、配慮の必要なお子さんの練習を何度か見てき

ました。だから今回のことも心配ないと僕は思いました。しかし、ご家族が心配していたことは他にもありました。

「自分の子どもは障がいのある子と関わらせたくない」と多くのご家庭が思うのではないかと心配でした。そんなことを僕自身考えたこともなかったのですが、とても複雑な気持ちになりました。自分が考えているように人が考えているとは限らないと知ったからです。そのご家族は「自分に障がいのある子どもが居なかつたら、そのように自分たちも考えていた可能性もあります。よそのご家庭のご心配も理解できます。」とも言われたそうです。もしかしたらここまで悲しい経験をされたからなのかもしれません。

僕は、その言葉を聞いてハッとしました。もしかしたら、障がいを持った人が身近にいる人と、そうでない人では、見ている世界は違うのかもしれない。また、そのように考えてしまうのは、自分と少し違うタイプの人のことをよ

く知らないことから生じる恐怖感からかもしれない。もし僕の妹が障がいを持っていなければ、自分と少し違うタイプの人への接し方や考え方は変わったものになっていたかもしれません。それは、「知らないこと」から来る戸惑いだと僕は思います。

妹が僕の妹として生まれてきてくれて良かったと思います。

その理由は「障がい」が身近にあることで目の前の人が誰であれ、「その人をその人として見る」ということがごく自然のこととして僕の感覚の中にあるからです。

僕の妹は僕の妹で、「障がい者の妹」だとはいちいち思いません。逆に、障がいがあると言われてもパツとしません。

きつと父のチームに所属する子ども達も支援学級に通うお子さんと長く接していく中で、「障がいを持っている〇〇くん」とは思わなくなっていくと思います。母の言葉を借りて言うと「人を様々なフィルターを通して見なくなる」ということです。結果的にそのお子さんは、父のクラブチームに入り、毎日練習を頑張っています。父のチームの子たちはみんな優しく、入部したお子さんとチームメイト両方にとって良かったと思いましたが、これからのチームにとっても大きいと思います。

父はよく「障がいの理解は異文化理解」と言います。

この先、多くの出会いがあると思います。その時、目の前の人を「きつとこんなやつだ」と決めつけず一歩近づいていきたいと思えます。「知ること」で、戸惑いや恐怖感も無くなると思えます。しばらくすれば、きつと「その人をその人として」見るようになり、良さがわかってくると思えます。

先入観にとらわれず

山口杏音

佐賀県立牛津高等学校 三年

私は高校二年生のとき、佐賀県高等学校教育研究会が主催する、海外研修に参加した。その研修の内容は、研修先である台湾の福祉について学ぶことだった。研修で、高齢者施設や幼稚園などの見学をしたのだが、最も印象に残っていることは、障害者施設の見学だ。そこでは主に、知的障害を持つ方が入所されていた。私は、障害者の方と接することがほとんど無く、施設の入所者どどのように接すれば良いのかわからなかったため、とても不安だった。

施設に着き、中へ入った時に、セキュリティがしっかりしており、きれいに清掃されているのだなと思い、施設の内装を見ていたのだが、一人の入所者と目が合った。その方はこちらをじっと見つめていて、私は「何だろう、怖い」と思った。その時の印象が強く残ってしまい、施設内の見学では入所者の方と目を合わせたくないと思ってしまう。入所者の方が施設の方に話しかけることでさえも怖く感じてしまっていた。しかし、施設内見学の後の、施設長

の講話で、私の怖いという思いは無くなった。

施設長は、施設の歴史から話し始めた。元々、障害者施設ではなく、孤児院として運営されていたそうだった。その中で障害児の割合が増えていき、障害児施設に切り変わり、やがて今のような施設になったのだと話してくれた。施設長の話の中で最も印象に残り、私の今までの考えを改めるとききっかけとなった話がある。それは、障害者の方たちが今までにどんな人生を送ってきたのかの話だ。台湾では障害者に対する理解がされるようになったのは最近のことで、それまで障害を持つ人や家族は、差別を受けてきていた。本人を守るために施設に入所させる家族がほとんどだったが、中には、自分たちが差別を受けないようにするために入所させていた家族もいたそうだった。その話を聞いて私は、ひどい事だと思ったが、自分自身も同じような事をしていたのではないかと思った。一瞬の出来事だけで、入所者全員のことを怖いと思い込み、先入観にとらわれてしまっ

いたことに気づいた。過去にも、このような理由で差別をしてしまっていた人がいるのではないかと考えた。周りの環境や風潮に流され、本人自身を見ずに施設へ入所させてしまった家族がいるかもしれない。今は世間が障害への理解をし始め、差別は少なくなってきたが、完全に無くなったわけではない。それは、台湾だけではなく、日本でも同じだと思う。私は、この施設見学で、障害者への理解を深めなければならぬ事と、無意識に人を差別しているかもしれないという事を学んだ。

施設から出る時、入所者の方と職員の方が見送ってくれた。その時に、最初にこちらを見ていた入所者の方とまた目が合った。今度は怖いと思わず、その方に、「謝謝」と伝えた。すると、表情がふと柔らかくなった。私は少し驚いたが、その方に自分の言葉が伝わった事を嬉しく思った。そして同時に、この方も、私たちが怖かったのだろうと気づいた。見ず知らずの外国人が、自分の家同然のこの施設を見て回っているのだから、不安になることもわかる。自分のことにしか目がいかず、周りの人への気遣いできていなかったことを反省した。

私は、看護師を目指している。常に周りを見て行動することはとても大切なことだ。そして、どんな患者さんとも対等に接しなければならぬ。台湾の研修では、これらができなかった。なので、これからは常に周りを見て

行動し、誰とでも対等に話すことを心がけて生活しようと思った。そして、障害者施設で学んだ、先入観にとらわれないということ周囲に働きかけていこうと思う。自分が実際に体験した、あの施設でのことをきっかけに考えが変わったのだと話をし、障害者に対する差別や偏見を無くしていきたい。一人ひとりの認識が変われば、必ず差別は無くなる。簡単なことではないが、自分のできることをしていこうと思う。一日でも早く、障害がある、ないに関わらず、みんなが笑顔で過ごせるようになってほしいと願う。